



アマリリスの花

官能開きの愉悅がある。恍惚が来る。アリスの魔術にかかったら、みんな手を清め、口笛を吹いてさんざめく降参する。緩めた紐が斑に交差して、ボクらの懐まで指先をまさぐり、喉元を静かにえぐる。数2B。まるきりスイート・ビートの歌姫が隣に火を付ける。燃えて溶けて、それから。

— 山崎春美



アマリリスと私

表紙・イラスト
装丁 細井尚登

目次

アマリリスの花	山崎 春美	1
雲なすアマリリス	保山ひゃん	4
保山ひゃんと私	アリスセイラー	10
さよならピーちゃん	シモーヌ深雪	12
シモーヌ深雪と私	アリスセイラー	18
三度の笛	細井 尚登	20
細井尚登と私	アリスセイラー	36
PLANNUMBER32—天空の甘きリリス	嶽本野ばら	38
嶽本野ばらと私	アリスセイラー	56
拝啓 アリスセイラー様	佐藤 薫	58
佐藤 薫と私	アリスセイラー	60
山崎春美と私	アリスセイラー	62

雲なすアマリリス

保山ひヤン

ライブハウスの照明が落ちる。

あちこちで「キヤー!」「オバケー!」「ユレレ」とふざける嬌声がとびかう。

一方「失明か?」いきなりの暗黒の到来に狼狽した人々が、「この中に眼科医はいませんか!」と怒号をあびせる。隣で大声をあげられた聴衆は、鼓膜を一度に3枚破る。

そうした匿名の雑魚たちの声を暴力的に打ち消すように、荘重にして軽妙な音楽が鳴り響く。この音楽は、長い間、ルイ13世が作曲したものといわれなき冤罪を受けて真実が幽閉されてきた謎の音楽だ。期待と不安に満ちた聴衆の全身に鳥肌がゾワワツとたつ。約2メートル。アマリリスの登場だ。

アマリリスを関西のアングラ、サブカル、ニューウェイブ、パンクなどの文脈で語る言辞に接するたび、僕はなんとも言えないもどかしさを感じてきた。

多くのアングラやニューウェイブは、誰かの影響下にあることを明らかに出来る。

また、ひとつ何かが出てきたら、雨後の筍がはえ、柳の下にドジョウが繁殖する。

だがアマリリスは空前にして絶後、しかるがゆえに来歴とも後継とも無縁なのである。

アマリリスを何らかの文脈で語ることなど出来ない。

ならば、文脈でなく、山脈で語ってみよう。

今回の復刻にあわせて、僕が日ごろ感じていた「アマリリスの七不思議」を「アマリリス百名山」とリニューアルして、ここにまとめてみよう。

事は前世紀にさかのぼる。

当時、大阪ミナミには「野村ビル」という「魔のビル」があった。道行く人々は、誰かと会えば必ずこのビルを噂したものだ。なぜ、このビルが「魔」なのかといえば、最上階に「創造道場」と呼ばれるアンダーグラウンドの総本山があったからである。のちにこの「創造道場」は「スタジオワン」と名を変えてさらにわれわれの心胆を永久に凍結させるのである。

寺山修司やルイス・キャロルでノンセンスの洗礼を受けただけで、何も知らないポツと出の少年

(僕)は、迷子になってこの野村ビルにたどりついたのである。

出演はアマリリス、とある。「アマリリス」と言えば、鮎川哲也の『りら荘事件』に出てくる、「ニリス」ではないか。僕は愛読する書物の人物に直接会えるものと信じて、開演を待った。実「そんな紅顔の美少年(僕)の思惑は足蹴にされた。」

アマリリスのテーマのあと、メンバーたちがライブハウスの後方からステージに向けて行進をはじめた。彼らは鼓笛隊であり、国籍を間違えたヒトラージュントであった。足の下に何があるうと、メンバーの決然たる歩行は決行された。いきおい、バッグやら飲料物やら観客の肉体は、単なる乗り越えるべき障害物でしなくなり、かく言う僕も世界で最も低い山として登山され、しかるのちに下山された口である。

後に、僕の日記には、この日の記録として、こう記述される。

「イナバの白うさぎにたまされた『ワニ』になった私」

その後のことはほとんど何も覚えていない。僕はそのとき、感性を陵辱され、刷新されたのだ。

アマリリスに破瓜された僕は、欠けた半身を乞い求める。

ある野外ライブのときは、ステージに集まったメンバーが何も演奏せず、ただ弁当を食べつつづけていた。

ある学園祭ライブでは、ぜんぜん別のロックバンドに「アマリリス」だと名乗らせて、本当のメンバーはそのバンドの演奏でただ踊っているだけだった。

あるライブではプログレッシブ・ロックのインストゥルメンタル曲に勝手な歌詞をつけて、最後まで大曲を歌いきっていた。

僕の知るかぎり、アマリリスはライブと称して、傍若無人のかぎりを尽くしているのである。

単なるパフォーマンス集団なのかと思いきや、車椅子のクララまで立って踊らせるほどの熱狂のライブバンドとしても君臨していた。

アマリリスの顔はひとつではないのだ。

アマリリスはあるときは関西アンダーグラウンドの梁山泊として存在し、あるときはイケメンバンドとして女子の愛液を搾り取り、あるときはギャルバンとして全身スーツを盗まれたりしてきた。メンバーのそれぞれの活躍については、きつと資料が付いていると思うので、それを参照。

思い出はかぎりなく無限に近い有限で存在している。

町田町蔵氏とともに行く東京ツアーに同行させてもらったこと。(楽器のことを何も知らない僕は、メンバーがセッティングする横で、ただ何もせずに漂っていた)

新メンバーオーディションで選ばれたミック宮川氏が、臼と杵で餅をつきながら喜びをあらわしていた狂騒の一夜。

アマリリスファンの集いで、みんなで大合唱した「深夜の出来事」

アマリリスの歪んだ空間の総元締めであるアリスセイラーに話を移すと、ネバーエンディングス
トーリーになってしまうので、簡単にひとことだけ。

アリスセイラーはその引力によって、多くの才能とコラボレーションしてきた。

そのつど、名前はソラリスやナタデココなどと変えながらそれぞれの分野で結果を残してきた。

僕もアリスセイラーとコラボレートして、何度もパフォーマンスタリ、イベントを企画したりして
きた。その記録だけできつと、大部な1冊が出来上がる。神戸まつりにも出た！

なかでも忘れられないのが、京大西部講堂前で企画された「ニューウェイブ大運動会」である。名
だたるニューウェイブのバンドのメンバーたちが、頭のおかしいゲームに興じ、その脇ではバンド演
奏が行われるのだ。あいにくと台風が上陸して中止になり、主催者一同胸をなでおろした。

また、アリスセイラーのものの考え方は、僕に大きな影響を与えている。

こんなことがあった。

ローリー・アンダーソンの来日公演があったとき、僕はそれを見て、かなりのショックを受けた。
アイディアが山とぶちこまれたライブで、僕は、自分のやってきたことの卑小さを思い知らされたの
だ。パフォーマンスはローリーにまかせて、僕は写経でもして一生を終えようと思っていた。

そこに、同じステージを見たアリスセイラーがやってきて、興奮気味にこう言った。

「やりたいこと、アイディアが山のように湧いてきた！」

確かに、そういわれてみれば、かなりの刺激を受けていたことに気づかされたのだ。

こうした積極的な考え方の力は、アリスセイラーによって開眼し、今こうして僕がニューウェイブ・
アンダーグラウンドの第一人者として大成するにいたったのも、すべてアリスセイラーのおかげなの
である。

これらすべてをまとめてみると、次のようになるだろう。

アマリリスは、アリスセイラーを艦長とする母艦である！

ピンとこない結論だし、意図も不明だし、最初の七不思議とか百名山はどうなったのかも置き去り
のままだが、とにかく、こうだ。村岱だって、僕がそう思ったんだ。QED。



保山ひゃんと私

アリスセイラー

心齋橋のスタジオワンで知り合いました。
保山君は当時はキマオロシという名前で特
殊な印刷物を配布したり、ライブの企画をし
たりしていました。
よく会っていた頃は、二人でパフォーマン
スをしていました。
今思えば、私、初代保山ギャルだったんで
すね。

さよなら。ピーちゃん

シモーヌ深雪

京都の四条木屋町を少し上がったところに、ソワレという喫茶店がある。

アリスとの待ち合わせの時間に、例によって遅れていった私は、高瀬川沿いの脇道をやや小走りに歩いていた。

道行く人がちらちらと、手に持った大きな荷物に視線をやるのが目の端でわかる。

電車の中でも同じような視線を感じた。

下の方だけを包装紙で雑にくるんだ、真四角の、天井に赤い取っ手のついた大振りの鳥かご。

十二月になると、京都の夕方はめつぼう寒くなる。吐く息の白さが、ますます寒さを感じさせる。

東向きにあるにも拘わらず、色褪せない東郷青児の絵を横目で見ながら、私はソワレの扉を静かに開けた。

アリスは奥の方の席にいて、こちらを見て微笑んでいた。

椅子が狭いよねえ、どうして全部カッパル席なの、相変わらずパフェは高いなあ、とお決まりの文句を一通り並べ、メニューを斜め読みしてコーヒーを頼み、私たちは雑談を交わし始めた。

もうすぐあるC B G Bでのジョイントライブのこと、レンタルレコード店で発見したソルマニアのソノシートのこと、偶然見つけた古着屋にあった豪華な帽子のこと、リキッドスカイのこと、アンリ・シャルパンティエのケーキのこと、その他いろいろ……。

小1時間ぐらいの時間が経ち、そろそろ帰る時刻にもなってきたので、私は本題を切り出すことにした。

今日、大阪から京都までやって来たのは、アリスに鳥かごを渡すためであった。

二週間ほど前、急に犬を飼うことになった我が家では、それまで飼っていたセキセイインコをどうするか決めかねていた。

私は一緒に最後までねばったのだが、結局、三羽とも友達や親戚に預けられてしまった。そのうちの一人がアリスだったのだ。

アリスに預けた黄色のセキセイインコは、一番人なつこくて性格も穏和だった。賢くもあつた。よく肩や頭の上で遊ばせた。羽切りをしなくても、どこにも飛んでいかないのではないかというくらい、家族みんなによく懐いていた。

名前はピーコ。よくある名前だが、そんなものである。彼はピーちゃんという愛称で呼ばれていた。「これ、持ってきたよ。」

簡単に取り扱いや掃除の説明をし、鳥かごをアリスに渡そうとした時、アリスは少し震える小さな声で鳥かごはいらなくなつたと言つた。

ピーちゃんは死んでしまつたと、さらに小さな声で言つた後、しばらく沈黙が続き、彼女は鳥が死んだ理由を話し始めた。

ピーちゃんがアリスの家に引き取られた最初の日から、窓に向かって猛突進していったらしい。何度も何度も頭から……。

そんなに頭打つたら死んじゃうよつて言い聞かせようとしたらしいが、ピーちゃんはアリスに構わず窓に向かって突進していったという。

きつともものすごく自分の家に帰りがたかつたんだと思うと、わずかに上擦つた声で言つた後、彼女は私の方に体の向きだけを変え、ごめんなさい、ごめんなさいと謝つた。

結局、ピーちゃんは二日目の夜にはぐつたりとして動かなくなっていたらしい。そのあたりのいきさつは詳しくは聞かなかつた。

それ以後も、電話で餌のことや遊び方などを話してはいたけれど、どうにもこうにも言い出せない話しを合わせていたのだということを、私は最後に聞かされた。

確かにショックだつたけれど、不思議と悲しくはなかつた。今から思えばだが、ピーちゃんが私たち飼い主に見せた真摯な愛情に対する嬉しさのようなものが、悲しみより勝つていたからかもしれない。

別れ際、アリスはごめんなさいを連発していたが、彼女を責める気には到底なれなかった。言い出せなかったこの何日か、死んだ夜もその次の日もその次の日も、さぞかし泣いただろうことがよくわかっていったから。

アリスにはそんな私の飄々とした姿が、とても軽々しく見えていたかもしれない。

この鳥かご重くてさ、また大阪まで持つて帰るのねと軽口を叩きながら、私は阪急の改札へと向かうアリスを見送った。

京阪の乗り場に向かう途中には四条大橋がある。ふとなにげに東の空を見上げたら、凍てついた冬の空には珍しく満天の星が輝いていた。

その中でひとときわ輝いている星があり、カシオペアかと思ったが、それは白鳥座のデネブだった。ピーちゃんがお空の星になったと思えるほど、私はロマンチストではない。

ただ、小さな小さな、だけど、死は本当にあったのだという事実が、改めて体の隅々にまで行き渡ったような気がした。

いつのまにか歩幅をゆるめ、しばらくはその光り輝く一等星を見つめていたように思う。

なぜならそれは、賀茂川から吹き上げる一陣の風の冷たさに、一気に現実を引き戻された記憶が

あるからだ。

南座の交差点を渡り、そうして私は大阪への帰路へと向かった。

普段はすっかり忘れていたことだが、今でもソワレの前を通る度、あの冬の夕暮れのことを思い出す。

今にも涙を流しそうだったアリスの横顔と、不幸にも死んでしまった賢くて甘え上手なピーちゃんのことを……。

さよなら、ピーちゃん。



シモーヌ深雪と私

アリスセイラー

ミック宮川ショーのゲストに出ていたときに、一目惚れしました。

よく会っていた頃は、お正月には毎年、梅田のスペース何とかというカラオケボックスで5〜6時間歌いました。当時私が、ヒステリックグラマーの福袋を買って行き、その中でいろいろな変な柄のセーターとかを10000円でシモーヌが引き取ってくれるというのも毎年の恒例行事でした。

三度の笛

細井尚登

1 乳児の夢

生まれながらに不幸なおれ様は自分の人生を呪って泣きわめいていた。

燃える貪欲、世界への瞋恚、内なる愚痴、そのどれもがおれ様に嘔吐感をもたらし、絶望に落とす込むのだ。

往来であるにも関わらず人目も気にせず大声で泣きわめくものだから、傍らにいる女性が悲しそうに、あるいは怒りに満ちた目でおれ様を呆然と見つめる。

おれ様は立っていられなくなりその場にしゃがみ込んで泣きわめいた。自分の泣きわめく哀れな姿がさらに怒りと呪いを増幅させ、もうどうなってもいいのだと自暴自棄に拍車をかける。

傍らの女性は天を仰ぎ見た後、仕方ない、と言うように「よいしょ」とおれ様を持ち上げ、乳母車に乗せ、風車をかざした。風車は風でぐるぐる回り、それを見ると科学者としてのおれ様は興味の対象が風と風車に移り、めまぐるしい科学思考のため先ほどの絶望感を忘れた。そして乗せられるとすぐに眠くなる乳母車の罨に気付く前に深い眠りに落ちるのだ。

「やれやれ。やつと寝てくれたか。泣きわめいて五月蠅いつちゅうねん。せやけどすぐ寝る子やなあこの子は」

おれ様の乗った乳母車を押しながら駅に向かう女性をおれ様は夢越しに見ている。

「ちよつと切符買うてくるから待つときや」寝ているおれ様に母親のように語りかける女性。

「切符で、どこ行くねん」夢越しに質問するおれ様。しかし夢越しなので相手は気づかない模様だ。切符がおれ様に見つからないようにそつと手に包んで隠し、女性は構内に入った。もし切符がおれ様に見つかったらおれ様は必ずやそれを自分で持ちたいと騒ぎ出すから寝ているといえども用心して隠すのである。

構内に飛行機が入ってきた。

女性が乗り込もうとすると車掌が「お子様連れは危険ですのお乗りになれません」と言う。おれ様は大人じゃこらと夢越しに怒鳴るが車掌には聞こえない。

「お子様はここに預けていただきます」

しばらく考えていた女性は「ほな預けるわ。よろしゅう頼みますね」と言っつてさつさと飛行機に乗り込んでしまった。

このあばずれ、おれ様を捨てやがったな。自分だけ飛行機に乗りやがったな。おれ様も飛行機に乗りたかった。飛行機に乗せろ。船でもいいから乗せろ。こら。

飛行機はゆつくりとホームから離れ、飛び立った。

風圧で乳母車に設置された風車がはじけ飛ぶ勢いでけたたましく回った。

おれ様は冷静さを失わないように気をつけてそつと起ち上がって父親に化け、乳母車に手を添えて駅員に話しかけた。「おおきに。わし、父親ですねんけど、この子、連れて帰りますわ。おおきに」

「お父さんですか」駅員は答えた「一応、お父さんということを確認させてください。では問題です。ぼーつとしてるのは何でしょう」

「えんとつ」

「正解です。お父さん、どうぞお連れください」

2 最初の笛

乳母車を転がしながら駅を出て空を見上げると、今しがた飛び立った飛行機が山の麓の小学校の

校庭に墜落するのが見えた。

地響きがして、黒煙が舞い上がった。

「落ちた」「落ちた」人々が騒ぎ出した。

飛行機の破片と人間の破片が空から降ってきていた。おれ様は急いで小学校に向かった。そこはまばゆいばかりの一面の死体景色。

まだ時おりぼとりぼとりと人間の破片が空から落ちてくるのを幼児の姿で巧みに避けながらあちこちの死体に駆けよって母親を探すものの、もはやただの肉しか見あたらず、母親の死は確実と思われた。

校庭の肉をかき分けているおれ様の肩に誰かが触れたので振り返ると母親が立っているのが驚いた。「うわ。生きてたんかいな」

母親は怪我一つない様子でにこやかに佇んでいる。「偶然、助かったわ」

どんな偶然やねんと答えようとしたときに、母親の首が少し伸びていることを発見した。伸び、そして少し傾いていた。その首どないした、と声に出す前にためらったのは、それを告げた途端に彼女は自覚して死ぬのではないかと判断したからだ。

首の長い母親との対話に耐えられず、おれ様は夢の世界から現実へと舞い戻るため、兼ねてから用意しておいた笛をくわえ、満身の力を込めて息を吹き込んだ。

ぴーっと笛が鳴き、白煙と共にアリスが現れた。
「呼んだのね。アリスを」アリスは乳母車のおれ様をのぞき込んだ。「ちびっ子のフリをしても無駄。幼児プレイに興味もない癖に」

アリスと始めて出会ったのが不良として街を彷徨うようになってからか、子供のころか、あるいは生まれる前か定かではない。少なくとも小学校に飛行機が墜落したときより以前なのは間違いないのだが、墜落事故がいつ起こったのかは明確ではない。五条新町に車が走っていた頃かもしれないし、大雨で丸物百貨店が浸水したあの日か、はたまた天ぶらの揚げ方が元で社長と喧嘩して店をクビになったあのころか、拾得か磔磔か *Dee Bees* かサーカスか *CBGB* か。何しろ気がつけばアリスはそこにいた。ような気がする。

「私に会いたいときはこの笛を吹きなさい。ただし吹けるのは3度まで」

アリスが笛を手渡し、白煙の中に消えて一輪のアマリリスに吸い込まれる姿を見守る水兵服に身を包んだ乳幼児のおれ様。

「おねえたん。おねえたんは誰なの。朝顔の精なの」

もう一度白煙が立ちアリスが現れた「あほ。朝顔ちゃう。アマリリスや」そして消えた。

こうして笛を手に入れ、最初の笛を夢の中で吹いてアリスは再び現れたのだ。

「幻覚の中で退行現象を起こして思わず笛を吹くとは、あんた、わりと情けないわね」

アリスは言った。「そういえばこんな事があったわ」アリスは語った。「朝5時に家に帰ったら、玄関の前にお母さんが立って待ってるのよ。私びっくりして」

「ずっと待ってたの？」乳母車からよいしょと降りたって年相応の不良少年に化けたおれ様がアリスに聞き返した。

「違う。そろそろ帰ってくると分かったので玄関に出たところだって」

「そりゃ凄いな」

幻覚と夢と幽霊と空飛ぶ円盤に日夜苦しめられていた年若き不良少年に化けたおれ様は心底感動した。子を思う親の気持ちは物理を越える。そういえばうちの猫（とめとみつけ）も、飼い主が帰ってくるのを察知して玄関で待つではないか。ああいう能力は人間にだってちゃんとあるのだ。

アリスとの他愛もない会話そのものが、破壊された人間性を取り戻すために必要不可欠なものとして若年不良少年に化けたおれ様に機能した。

最初の笛を吹いたのがこの夢の中でよかった。後になって思ったものだ。最初の笛で現れたアマリリスの精霊は、貪欲に身を沈めていた若年性不良少年おれ様の最初の死を救ったのだ。

3 第二の笛

「おれのことを大佐と呼べ」

軍人に化けながらもその実態は左翼活動家のスパイであるおれ様は一同を眺め回して叫んだ。「そして大佐、手紙が来ませんと言え。わかったか」一同ぼかんと聞いている。いかん。このままでは偽軍人ということがバレてしまう。偽物だとバレると銃殺間違いなしだ。

これまでに何人もの仲間を失った。皆、夢の中で真実を語ったために正体がバレて殺されたのである。

戦争とはおぞましいものだ。国家レベルでは単なる公共事業だが、現場では死が続出だ。現場は御免だ。これ以上誰かが死ぬのは御免だ。たとえ敵でもだ。たとえ夢でもだ。

おれ様の傲慢はそろそろピークに達していた。死への恐怖心を怒りに置き換えていただけなのは明白で、幼児の駄々と同じで、それは瞋恚だ。

「大佐」一人の兵士が言った。「瞋恚大佐」

「その名を呼ぶな。大佐だけでいいんだ。何だ」

「瞋恚大佐、そろそろお目覚めでごんす」

「何を言つとるか貴様」

「いやだから瞋恚大佐、もう昼でごんす」

「うわ昼やがな」

飛び起きたらもうとつくに午後を回っていた。またすつぽかしたか。この怠惰な阿呆の暮らしは何事だ。

そう。この頃の怠惰で狂った生活は、人を痛めつけた罰なのである。

最初の笛からどれほどの時間が流れたかと思いきや、全然流れてないに等しいのは、これもひとつの罰であるからに相違ない。瞋恚に任せて荒れ狂ったあげく他人を痛めつけ、その他人の痛みより己の苦痛のほうを大きく感じるとは最低最悪の自己中人間であり、言わば他人からの迷惑に敏感で自分からの迷惑には鈍感な嫌煙の連中と何ら変わることはないファシストの変態である。

ええいくそ。と、己の瞋恚がまだ理解し切れていない瞋恚ちゃんは祇園のキャバレーで今日も豪遊だ。

「瞋さくんおひさしぶり」「瞋さん」「しんちゃん今日は帰さないわよ」

「その名を呼ぶなつて。お。とめこにみけこ。今日も可愛いのうち。手からご飯か。よしよし。げへへ」その様を遠くからずつと眺めていた私は見るに見かねてアマリリスの精から預かった笛を取り出した。

「あつ。その笛は」瞋恚大佐はこちらを見上げて叫んだ。「その笛を吹くな。その笛を今吹かれるとやばい。よせ」だが私はお構いなしに笛を吹いた。

ぴーつと笛が鳴り、白煙と共にアリスが現れた。

「呼んだのね。アリスを」

アリスはキャバレー内をゆつくり見渡し、最後に瞋恚大佐を睨みつけた。「ださ」

瞋恚大佐は這いつくばった。「いやあのその」

「お黙り」アリスは土下座する瞋恚大佐の頭を踏みつけた。「あんたはどうしようもない駄目人間。屑。気違い」しかし足の下で瞋恚大佐が喜んでることを発見した。「うわ。こいつ、喜んでるわ。マゾ。変態」

私は居ても立つてもいられなくなり、アリスの前に躍り出た。「すみません。すぐ片づけますよつて」瞋恚大佐を踏みつけてバラバラにし、箒ほうきで掃いてチリトリに集め、屑籠に放り込みながら私はアリスに「すみません、すみません」と謝り続けた。

アリスは地獄の底からの明るい笑顔で答えた。「あはは。2度目の笛を吹いたのね」

「お久しぶりで」私はなるべく紳士的に御挨拶した。

こうして悪夢の中で瞋恚は一掃された。

4 第三の笛

居間で老人が猫に語りかけていた。

「それでな、わしは慌てて小学校へ走った。飛行機が墜落しててな、煙がもうもうと立ちこめておつた。あたり一面、死体だらけじゃ。それでもわしは肉の中から肉親の欠片を見つけようと無我夢中で」

「こんなこともあったな。レストランの厨房で働いていた頃じゃ。同僚の頭をな、こう後ろから冗談でどついたらな、同僚は練っていたハンバーグの中に頭をつつこんでボールが割れ頭も割れて脳味噌とハンバーグが混ざってしもてな、後で選り分けるのが大変で」

「わしが牧師をしていた頃じゃ。わしの説教の日にはわしの後ろのスクリーンに映画がかかっていたんじゃが、わし自身は説教があるので振り向いて見ることができん。みんなは見とるわけやな、わしはその映画が見とうて見とうて仕方なかったんじゃが」

このように、老人は毎日ふたりの猫に語りかけていた。

「この人いつもここにいるけど、誰なん？」老人を見上げてとめがみつけに言った。

「知らん人やな」みつけが老人を見つめながら答えた。「いつも何か鳴いてるな。変な鳴き声やな」

「昨日もこの人いたつけ」

「さあ。昨日って何やった？」

「何やる。昨日って」

「さあ」

「さあ」

老人が手に餌を乗せるととめが歓喜の声を上げた。「わあ。手からご飯や」とめは老人の手から餌をむさぼり食った。

「私は御免やわ。手からご飯なんて」みっけは素知らぬ顔で高いところに昇り、とめの様子をじつと見つめる。

「因果応報いう言葉があつてな」老人が猫に語りかける。「結果には原因があるちゆうことやで」

「とめ、付き合いきれんから寝るで」

「寝よ寝よ」二人は箱に入り身を寄せ合つて寝る。

老人も仕方なしにうとうとし始める。最近では夢を記憶することもめつきり減つてしまった。しかし記憶はせずとも夢は現れる。

二度目のアマリスの精を呼び出してから長い年月が経っていた。残る機会はあと一度だけだ。残り一度となればおいそれと吹くわけにはいかない。吹けばそれで終わりということだ。こうして最後の一回をケチくさく我慢したせいで、おれ様はすっかり年を取り、年を取りすぎて死んでしまつ

た。人間いつか死ぬのだ。昔ならいざ知らず、特に感慨もないのだ。しかし死んでから笛を吹いていないことに気づいた。

「しまった。こんなことなら、もう一度吹いておくんだつた」おれ様としてはこのしくじりは不本意であつた。

極楽の蓮池の縁に腰掛け、紫陽花あじさいの隙間からこちらをじつと見つめるみっけに話しかけた。

「やあ。こんなところに。ひさぶりやな、みっけ」みっけはおれ様の悪巧みを何とか見抜こうと油断なく見つめている。

「あれから何十年も経つたとは思えんな。せやけど、何十年ちゆうても、ついこないだみたいなのもんな」

「ほんまやな」仕方なく油断せぬようにみっけが答える。「ついこないだみたいなのもんな」極楽にいるのだから、もう会話が成り立つのである。

「話の筋としてはやな、最も愚かなタイミングで三度の笛を吹くのが、これが正統派や。そやろ」

「そやな。順当やな」

「しかしそうはいかんのじゃ」

みっけは一瞬ひるむが、気を取りなして「そうもいかへんな」と適当に答える。

「ここは極楽浄土やからな。蓮や紫陽花はあつてもアマリスが見あたらん。そこが残念じゃ」

「何を青臭いこと愚痴愚痴言うもんねん」ついにみつけが切れた。「愚かなタイミングだ？それは今じゃ。笛貸せ。あたしが吹いたるわ」吹いた。

ぴーつと笛が鳴り、白煙と共にアリスが現れた。

「呼んだのね。アリスを」

「出たっ」

その叫び声に驚いて思わず覚醒。案の定時間が遡り、アリスと一緒にいるアリスの倅もすでに小学生である。おれ様もみつけも極楽から帰還し、煩惱の根源を大まかに克服したことをすでに承認している。

アリスの倅がテレビの前に座って言った。「ゲームしていい？」

「ええよ。何でもやってええよ」ゲームには自信があるおれ様が大らかに答える。

「これ何のゲーム？これやっていい？」

「どうぞどうぞ。やってみ。ちよつと難しいかもな」

倅は必死でゲームに取り組み、アリスとおれ様は軽い世間話に花を咲かせるのであった。気づけば倅がコントローラー片手に涙を浮かべている。思うように出来ないのが悔しいらしい。倅よ。その悔しさを忘れるな。根性で乗り切れ。

その後しばし時が流れ、倅から電話がかかってきた時に父ちゃんは喜んだ。「倅よ。おれのことを

父ちゃんと呼んでくれ。だがな、おれはお前の父ちゃんではないのだ」

「ちよつとゲームのことで聞きたいことが」

「なになにどんなこと」

こうして倅は根性と知性で難しいゲームをクリアし、後にステージデビューも果たした。

アリスがしみじみと語った。「長いながい時間が経ったわね。あなたの新しい人生の始まりを祝して、Nintendo DSを贈ります」アリスのプレゼントを受け取り、おれ様の目はまん丸になった。

「三度の笛は三人の精霊。三度の飯より三度笠。すでに長い付き合いになってしまった私と物語には直接登場していない仲間の精霊たちからのこのプレゼントは煩惱を断ち切りません。断つのではなく、それを踏まえて悟りを見出せばいいんです」

「その通り。無駄と非合理こそエコロジ」あふれる涙を拭いもせずにおれ様は叫んだ。「駄目人間万歳」

5 煩惱即菩提

「と、そういうわけだな、アマリスの精霊とわしの、長い長い物語はこれで終わりなのじゃ」

二人の猫と一人の妻にすべてを語り終え、私はパイプをふかした。クリスマスMASの飾りと暖炉の火が4人を照らした。とめが手からご飯を食べ、みっけが椅子を奪って寝そべった。

「引っ越しも落ち着いたし、アリスさん、お呼びしたいなあ」妻が言った。

「しかし、もう三度の笛を吹いてしまったのだ」溜息と共に答える。窓の外に雪がちらついた。「ほんなら、電話したらええやん」みっけが面倒臭そうに言った。

日が昇り、春の日差しが差し込んだ。

とめがにゃーと鳴いた。

その後、アリスに電話してみんなで一緒に遊んだり対バンしたりした。



細井尚登と私

アリスセイラー

多分、Dee-Beesで知り合いました。
始めてしゃべったのはいつか、おぼえてい
ません。

細井君は、チルドレンクレーターのリー
ダーでベーシストなんです。細井工房とい
う壁画を描くお仕事をされていて、バブルの時
は私もアルバイトをさせてもらいました。

よく会っていた頃は、京都のミュージシャ
ン仲間で、琵琶湖に泳ぎに行ったり鴨川で花
火をしたり、あちこち遊びに行きました。

PLANNUMBER32——天空の甘きリリス

嶽本野ばら

佐藤は長い溜息を吐きながらポケットに仕舞っていた懐中時計の秒針を眺めていた。

「まさかこの日が本当にくるなんてな」

戦争の傷がまだ癒えていないとはいえ、もう普段着で軍服をきている者は流石に少なくなった。

否応にもだから佐藤の姿は眼についた。

待ち合わせ場所は赤の防御線前だ。

佐藤が到着する前に待ち合わせ人は到着していた。

「佐藤——。三分四七秒の遅刻ですよ」

「相変わらず、お時間にはお厳しい」

「お前がルーズ過ぎるのです。何の為に時計があるのですか？」

「……」

「お前の学習せぬ凡愚ぶりにはイライラさせられるのです！」

「ふ、ふ、ふ、」

「何が可笑しい訳？」

「否、失礼。——やはりアリスお嬢様だと。まるでお変わりがない。

戦渦をどうすごされたかさえ、つい最近、風の噂にきいたくらいで情報がまるで入ってきませんでしたからね。

俺、がすぐにお屋敷を目指せばよかつたんだが、そういう状況でもなくてさ。

あの時、もろにA地区だったもんで」

「そう。お前がA地区であるのはきいていました。ですから探させたのです」

「俺様の如き執事の身をご案じ下さったのですか？フェルナンデス家のお嬢様が」

そういわれると、アリスは俯く。

背は低い。

ツインテールの真つ赤な付けているミニハットと同色のドレス姿の少女。

「……という訳ではないのだけれど、執事としてのお前の代わりなんていくらだってだっているし、わざわざだから今まで探さなかつただろうが……」

「……ではなく……もつと有能な者と取り替えたいのは山々なのだけれども、……つまり、おまえしか私の能力を覚醒させられないんだろ。蒼い——」

「ルーンの指輪が力を発揮するのは、サラマンドラのマントラを唱えた時のみです」

馬車に乗り、佐藤とアリスはフェルナンデス家に向かう。

「非道いやられかただ」

「まあ、前のフェルナンデス家を知っていれば驚くのは仕方ないかもね」

この屋敷のシンボルでもあった中央のシャトーが根底から折れ、なくなっている。

植物園のような薔薇のエントランスゲートも瓦礫と化してしまっている。

「生活に不便は……」

「雨漏りとかはするけどね、まあ、毎日降るもんじゃないから我慢してあげているわ」

「それじゃ、俺が直しておいてやるよ」

「馬鹿者。誰にもものをもうしておるのですか？ どうして執事たるお前がこのわたしのためにため口なのですか！」

「さつきはよかつたじゃん……」

「先程も腹に据えかねましたが、特別処置として恩赦してもよいかと」

佐藤はわざとらしく丁寧にお辞儀をし、アリスの瞳を見詰めた。

「それでご用件は……」

アリスは俯く。

「あれが発動されたという訳ですね。」

亡きお父様、知発理論コードシフト理論の権威ドクター、お母上がなくなられてから一人でお嬢様を育てて下さったプランナンバー32、通称、甘きリリスが——」

暫くの沈黙があった。

口をきいたのはアリスだった。

「リリスは——最終手段。使わなくともいいのなら使わぬままにしたいジョーカー」

「しかしお父上のクラナド・シミュレーションはこれしか回避不効能と答をお出しになった」

「クラナド・シミュレーションが何時も正しいとは限らないわ。それに——」

「それに？」

「幾らルーンの指輪があるとはいえ、私、甘きリリスが操縦出来る自信がない。だって、初めてなんだよ。乗るの。それでいて、絶対に失敗は許されないんだよ。無理だよ、そんなの」

「少なくとも私はアリス様が、最後は必ず全てうまくやって下さる。この世界をお守りくださると信じておりますよ」

「サラムンドラの呪文しか掛けなくていいんだから……お前は、いいよねえ」

佐藤はアリスの頬を思わず打ちかけたが、「ご免」、すぐに後ろを向いた。

「代わってやりてえよ。」

だけど俺には蒼いルーンの指輪に呪文を掛けることしか出来ないんだ。その指輪はお前しか選ばない。俺では駄目なんだ。お前が毎回、恐れるのは解る。代わってやれない自分が情けねーよ。

でも甘きリリスは蒼いルーンの指輪の持ち主としかシンクロしない。上手くいえないけどお前一人が戦ってるんじゃない。

お前が戦っている横には必ず俺がいる」

アリスははつとした表情になったが、佐藤から肩に手を掛けられると、何時ものツンデレぶりて顔を横に振った。

「必ず俺がいる——。必ず俺がいる——。」

俺がいるではなくて、私がご一緒に頂きますでしょう、バカ執事」

「そうでございますね」

「でも。有り難う。不思議と出来そうな気がしてきたわ。妙な自信が湧いてきたわよ。」

私が失敗するということは、人類が破滅するということで、そうすると私も死ぬし、佐藤、お前も死んでしまうのですね。

幾ら畜生の如き階級の卑しい執事とはいえ、命を奪っては幾ら何でも雇い主としていき過ぎすぎですもの。

任しておきなさい。佐藤、貴方、ちゃんと助けてあげるわ」

「有り難うございます。アリス様」

「外はボロボロだし、中も水漏れのスゴいところとかあるけど、地下の実験室はビクともしなかつたから大丈夫」

アリスに手招きされるように佐藤としては懐かしい地下の扉を開く。
全員、見知った顔だ。

「お前ら、全員？」

「戦争中もこのラボラトリーに籠っていたからなあ」
そういったのは安田だ。

彼はアリスの祖父の事実上の実験の後継者である。

「研究者、エンジニア以外でここに入出力出来るのは、アリスお嬢様と、魔法の呪文を掛ける怪し気な執事さんだけだよ」

そういったのはハルヲ。

エンジニアらしく普段は無口だが、安田との再会がよほど嬉しいのか今日は珍しく饒舌だ。

「緊急事態にしか登場してこない男。——ワシにとつては疫病神に思えるよ」

そういつて最後に迎え入れたのは総指揮官の福田だ。

「確かに、そうかもしれないね」

佐藤は冗談めかしてそれを認めたが、その眼は悲し気だった。

「おまえが来たということは」

「即ち」

「そう」

「最後の領域」

「世界の命運をかけることになる」

「甘きリリス」

「プランナンバー32」

「始動」

「するのだな」

「本当に」

佐藤は面倒くさそうに首を縦に振った。

「でなきや、何故にここにいるの？」

「俺はアリス様がリリスに乗ろうとしておられるのを止められるのはお前ぐらいの適当人間、悔しいけれどなんだかんだでアリスお嬢様はお前の意見はちゃんとときく耳をお持ちのようだからな。説得の為に呼び出されたのだと思っていたよ」

「アリス様はもう最初からお決めだったのですよ。プランナンバー32が出た瞬間、自分はリリス

に乗るのだと」

「我々に出来ることは……」

「信じることだけです。」

アリスお嬢様、貴方は一人で戦っているのではない。

ここにこうしてこんなにも貴方を信じるもの達がいるんですから。

その気持ちをそのまま伝えればいい」

「そうだな」

「それしか……。でも」

とハルヲが何かいおうとした瞬間、部屋がグラリと揺れた。

いち早くスクリーンには嗜都が映し出される。

緊急

事態。

嗜都がまたも現れたのだ。

これまでの嗜都はケイゾリン放射で何とか対処出来ていた。

しかしこの前に現れた嗜都にはケイゾリン放射がまるで役に立たないのだ。

免疫をつけたというよりも嗜都は格段に急速な進化をした。

だからこそクラナド・シミュレーションはプランナンバー32を指示、選択したのだ。

「来やがった」

「やけに早い」

「前より速度、上がってないか？」

「今から思えばこの前のヤツは偵察というふうだった」

「今日の暴れ方をみると、そうかもな」

「ヤバイぞ」

「恐らく……嗜都はここ。フェルナンデス家の隠された心臓を狙っている」

「ま、毎回ここから攻撃していたので、ここさえ壊しちゃえばと思うのは常識だよな」

「ストライクゾーンの狭い常識ではあるが」

「今すぐにでも」

「リリスの出勤を」

「緊急モード、操作マニュアル手動に切り替えつつバックアップ体制。」

同時に各自スタッフ、アンドロリン装着、マザーの直接入力プラグに申請の許可を出し、互いにパスワードを確認。

いいか、これからはシミュレーションはしてはいるが、未知の世界だ。何を眼にしようが腰を引くな。

諦めるな。どんな状況にあらうと……だ」

福田の言葉にハルヲも安田も頷き、佐藤の横に立つてったアリスのほうを観る。

アリスは力強く笑顔で頷いた。

「世界の未来はこの私に任せない！」

アリスは気付いた。

寝ていたらしい。

でも何処で……。

今の現状がおかしいのを徐々に理解していく。まるい球の中に裸で、

それも五歳ぐらいの姿でいるのって、変だよな？

夢——？ でもない。ああ、そうだ。

プランナンバー32、甘きリリスとシンクロし今、私は操縦師としてここにいるのだ。

佐藤がアリスの左手の薬指に嵌められた蒼いルーンの指輪を手に取る。

跪き、この時ばかりは何処から出てきたのか解らない白い手袋をした手で、エスコートするよ
うに、しかし何処か指輪に顔を近付け過ぎているので妖艶で妖しくもみえる、指輪に呪文の文言を
投げ掛ける。

サラマンドラの呪文……。

そして意識を失った。

私はこの甘きリリスの中で再生した。

「聴こえるか？ アリス！」

「何処から聴こえるのかは解らないけれど、がなる佐藤の声はとてよく聴こえる。

「聴こえますでしょうか？ アリスお嬢様——でしょう」

「聴こえるんだな」

「ですから……」

「こつちからはそちらの視界はある程度しか理解出来ない。

定点レントゲン式優性保護撒膜用カメラなので高性能とはいえ、位置がずれるとどうなってるのか解らなくなる可能性もある。で——調子はどうだ？ 気分悪いとかないか？」

「アホ。そっちを先に心配しろ。」

カメラが定点レントゲン式優性保護撒膜用なんてことを説明する前に

「うむ。でもカプセル——搭乗席に入っていく時、とても幸せそうな顔をしてたから、大丈夫ってか……」

お前のことをリリスに任せていいってのかな、そんな気がしたから」

「うん。そんな感じ」

——シンクロエナジー。

完全にコンプロート・ジャンプ。

「おい、アリス。前から、嗜都」

「うひゃ」

「今度は横に廻られた」

「つてのは」

「足で蹴れよ！」

「なんか、ネバネバしてるんすけど」

「ネバネバ？」

「前はこんなにネバネバじゃなかった訳。多少、ぬるつとした部分はあったけれど。」

なのに、今回は、どこもかしこもネバネバしてんのよ、なに、これ？」

「そういわれても……」

「ですから、少し距離を置きましてプランナンバー32、甘きリリスの持つあれを」

「Cインパクトを起こせていうのね」

「……ああ」

「じゃ、一気にいくからそこで待機しているバカ執事と研究者達よ、一緒にね」

「うん」

「ああ」

「Cインパクト」

「解凍」

「再生」

爆発。

——観たことのない光——。

佐藤は寝ている。フェルナンデス家の一室で。

Cインパクトを再生させた途端、嗜都は燃えるように消えていった。

否、全ての世界が消え去ったような感覚を、皆、受けただろうからここでわざわざ説明はいらな

いだろう。

寝ていた部屋にアリスが入ってきた。アリスは佐藤を起こす。当然の如く。

「もう嗜都って、こないのかしら」

「何度、質問すれば解る。あれだけぶつちぎってやられたんだ、残りがいたとしても出てこられないよ。」

Cインパクトがある限り、この世界は無敵だから」

「仕返しとか考えてるに違いないと思わない？ 私なら考えるんだけど」

「出来れば考えて欲しくはないがな」

「欲しいわよ！ 仕返ししようとして、今まで以上にネバネバになったりするもよし、べとべとになつてくれるもよし、巨人になろうと細菌になろうと何でもいいんだけどね……」

「いいんだけど？」

「前より強くなって私に戦いを挑んで貰いたいのよ」

アリスは嗜都との決戦がCインパクトを出してしまった途端、すぐに終わってしまったことが非常に不満な様子だった。

バトルがよっぽど楽しかったらしい。

「この前みたく地球規模のバトルじゃないくていいのよね。
そつちで負ける気はしないし。

でもCインパクトを使つても勝つのが難しいもの、手に出来ぬものがあるかもしれないじゃない？

ほら、コミケとか？ 対戦してみたいなー。どこまで効くんだろ、Cインパクトって」

暫くはこの城に足を留めることになりそうだ。

佐藤はそう思いアリスを観た。

執事としての制服、というものがあるのかどうか解らぬが、そのようにみえる衣装も買いにいかねばならない。

何時までも軍服ではいけないだろう。

「Cインパクトで萌え力アップ」

と、ネコミミを頭に装着しているアリス。

佐藤は笑った——。



嶽本野ばらと私

アリスセイラー

あがた森魚さんのバックコーラスを引き受けたときの相方が野ばらちゃんでした。初めてのデートは伏見桃山城キャッスルランドのスケートリンクに行きました。よく会っていた頃はナタデココというアイドルユニットを組み、宍戸留美さんのコンサートのゲストにも出ました。

拝啓 アリスセイラー様

この度は、読書室「レジット出版」のオープン、おめでとうございます。

長年の夢が実現して、満足感でいっぱいのことと思います。お嬢さまのセンスのよさを生かした、落ち着いた雰囲気の出版社だと聞いています。

貴社は駅のすぐ近くで、しかも伏見桃山城を控えているという絶好の場所にあるのですから、繁盛間違いなしだと思います。

初め、脱サラで出版社を始めると伺った時には驚き、無茶だと思い反対も致しましたが、私の軽率な判断だったようです。

読む楽しみ、観る楽しみ、知る楽しみ三拍子揃った出版社になることでしょう！「この出版社の本をまた読みたい」という気持ちにさせる、愛される出版社を期待しています！

ささやかですが、お祝いの球根をお届けしましたので、お受け取りください。

平成22年12月吉日

佐藤薫



佐藤薫と私

アリスセイラー

のいづんずりの福田君に連れられて佐藤さんの家に遊びに行った時、坂本龍一に電話をかけていたのでびっくりしました。

東京で居候させてもらっていた時は、晩ごはんを必ず作るという決まりをもっけられていたので、ライブでヘトヘトになって帰ってきててもごはんを作っていました。が、若かったのであんまり疲れませんでした。



山崎春美と私

アリスセイラー

佐藤さんの家で居候中に「そこにアリスセイラーおるやろ。うちの〇〇をイジメてるらしい。顔かせや」とおどしの電話がかかってきた時のことは今も忘れられません。佐藤さんが会いに行ったのかどうかは知りませんが、春美さんとかかわり合うとろくな事ありません。

なるべく接触しないよう心がけています。

アマリリスと私

2010年12月15日 第一刷発行

発行者 中塚加奈子

発行所 レジット出版

アマリリス総合研究所

編集 細井尚登

ア
ア
リ
リスと
私

